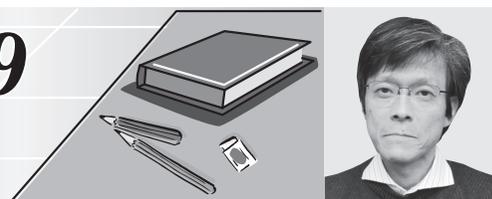


学生時代と図書館 109

「公的な私的空間」

金子哲太



図書館での思い出といえば、4回生の夏以降の記憶に始まる。ドイツ語学ゼミで卒業論文を書いていたころである。しかし本当に足しげく通うようになったのは、部活動最後のシーズンを終えた11月に入ってからであった。これ見よがしに自分の席の周りに積んだ、橋本文雄、相良守峯、そして関口存男らひと昔以上前の文法書や辞書の類は、西洋文化の香りが漂う格調高いドイツ語の例文はもとより、旧仮名遣いの混じった古風な文体による文法説明を読み解くことがまずは課題であり、またそれだけでも勉強している気分になることができた。

大学院に進学すると、閲覧室は予習室となる。授業では、カフカ、フリッシュラ現代作家の小説作品あるいはカイザーの言語芸術論などで原書講読がなされたが、特に気を惹いたのは、中世高地ドイツ語であった。濱崎長壽先生のご著書『ニーベルンゲンの歌』を読み進めるにあたって、学部生は入れない第3閲覧室にてレクサーの辞書を片手に予習したことを記憶している。また、岩本忠先生の授業で出された、印欧語の語根がヨーロッパ諸語でどのような発展を遂げているかという課題では、同室でしか使えないポルニーの辞書と格闘して作った語彙表について褒められたのが素直に嬉しかった。

さて、私にとって図書館は学習の場としての性格を強くもっていた。院生研究室はどこもたいていは談話室となることのほうが多かったように思う。下宿に戻ると、毎食の準備、後片付け、買い物、洗濯、掃除など家事を行なう一方、同じように他者のさまざまな生活音を耳にするため、日常の生活サイクルの中ではよほど追い込まれないと長時間集中することはできなかった。生活人としての自分から抜けきることができなかった私には、ただ図書館だけがそのような枷から解放される自由な空間であった。

しかしそこは完全に一人になれる私的空間と

いうわけではない。書架の前で調べものをする人もいれば、静かに読書に耽る人もいる。ページをめくる音や断続的に書き続ける音も聞こえてくる。ふとしたタイミングで他人と目が合うこともある。静まり返ったかと思うと、また本を閉じ、筆記用具を筆箱に戻し、かばんに収めるファスナーの音が耳に入ってくる。館内でふつうに知覚されるこうした事象はすべて、一連の精神活動の中から生じるものであり、その表れの一部であると言うことができる。そこに出来上がっている共通の空間は、書物に向き合う各人が醸す空気によって作られているが、また相互に程よい緊張感を与えあっている。

この環境が重要であるのは集中と弛緩の行き来が無理なく発揮できる点である。誰しも、一定時間集中力を使ったあとに我に戻るとき、即座に日常の時間の流れに戻るわけではなく、しばらくは思考の世界に留まっているであろう。館内に漂う空気はこの中間段階にいる自分を包み込んでくれる。館外から聞こえてくる車のモーター音、課外活動での発声練習や管楽器練習の抑揚のない音などは館内の空気とはまったく異なる世界のものであり、弛緩したときの意識の流れを保つのに却って役立っているようにさえ感じる。図書館は、人を日常のコンテクストから解放し、また意識の連続性を確保してくれる。

学生・院生時代は周囲の環境に左右され易かったし、学習内容や学習方法もいびつであったと思う。後期課程に入り授業内外で中世のドイツ語や古代のゲルマン語などを学ぶ機会が増えたが、テキストの精読や研究を行なう場として図書館の存在は大きかった。進学先では完全に一人になれる個室も使用できたが、他者の息遣いを感じられる閲覧室で学習者の一人として勉強するほうが私には好ましかった。

かねこ てった（講師・ドイツ語学、ドイツ語史）